

英国の方言 デヴォン編

経営学部

安藤 聡

英語にもさまざまな方言がある。英国語と米国語はまさに関東の日本語と関西の日本語のような関係にあるし、カナダの英語は標準的な米国語と明らかに異なる。アイルランド共和国の第二公用語である英語（第一公用語はあくまでもアイルランド語）はジョナサン・スウィフト（1667～1745、『ガリヴァー旅行記』の作者）によれば「世界で最も美しい英語」なんだそうだ。さらに、世界中には英語を母国語としないが英語を共通語として用いている地域があり、それぞれが発音、語法ともに独自の英語である。例えばマレーシアで人にものを丁重に頼むときには、‘Will you please ~?’ と言う代わりに ‘Will you sir ~?’ と言う。

英国の中だけでもイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドにはそれぞれ独自の英語がある。「英語」を英語で「イングリッシュ」と言うくらいだから、イングランドのそれが「標準」なのかと言えば、話はそれほど単純ではない。イングランドの中にも気が遠くなるほど多くの方言があるのだ。

イングランドの方言には「縦」と「横」がある。「縦の方言」とは階級の「方言」のことであり、いわゆる上流階級の英語、中流階級の英語、労働者階級の英語という区分になる。いわゆる「クイーンズ・イングリッシュ（国王が男性の時はキングズ・イングリッシュ）」は狭義では王室の英語、広義では上流階級と上層中流階級（聖職者や研究者、それに弁護士や会計士などのいわゆる専門職

階級）の英語を意味する。この階級の英語にも色々なヴァリエーションがあり、「クイーンズ・イングリッシュ」イコール「標準語」ということにはならない。「模範的な英語」の代名詞とよく言われる「BBC英語」もまた、BBCのアナウンサーが話す「特殊な」英語だ。例えば「プライベート」を「プリーヴァシー」と発音したり、朝のニュースでの挨拶が ‘Very good morning to you.’ だったりする。一方「横の方言」とは言うまでもなく地理的な方言のことで、実は「縦の方言」と「横の方言」は密接に関係している。なぜなら、上流・中流階級の人々の話し言葉はどこの方地方に行ってもそれほど激しくは異ならない。横の方言それぞれの特徴を最も伝えているのは多くの場合労働者階級の人々なのである。イングランドの標準語は英語音声学の世界では「RP」すなわち「容認発音（Received Pronunciation）」と呼ばれるが、これは「ロンドンとブリストルを結んだ直線より南側に生まれ育った学のある人が話す英語」と定義されている。面白いことに、その「学のある人」養成所の頂点であるはずのオクスフォードとケインブリッジが、この容認発音の境界線より北にある。

と、ここまでは前置きである。今回はデヴォン州の方言についてお話ししたい。デヴォンはイングランド南西の半島の付け根に位置する、南北に海岸と中央に大丘陵地帯を有する風光明媚な地方である。かつては「デヴォンシャー」と呼ばれていたが、現在は「デヴォン」である。州都として古都エクセターが、第二都市として港町プリマスがある。デヴォン全域が、容認発音の境界線よりは確かに南であるが、この線より西に大きくずれている。

愛知県内でも名古屋弁と三河弁にはかなりの違いがあるが、デヴォンの中でもそれぞれの地域によって方言がかなり異なる。ここではデヴォン全体に共通して見られる特徴をいくつか紹介しよう。まずは一般動詞の過去形と過去分詞形が、原則としてすべて「~d」「~ed」になる。「go - went - gone」は「go - goed - goed」、「sing - sang -

sung」は「sing - singed - singed」である。いちいち変化形を覚えなくて済むから楽でよい。

この地方の方言には‘are’というbe動詞が存在しない。一人称複数（つまり‘we’）および二人称（単数でも複数でも‘you’。ついでながら、‘you’はくひとりでも複数>と覚えておこう）のbe動詞の現在形は‘are’ではなく‘am’か‘is’か‘be’のいずれかになる。人称代名詞は主格（I, we, he, she など）の代わりに目的格（me, us, him, her など）が使われることが多い（ただしhimはあまり使われず、男性についてもherが使われ、後述のように‘er’になる）。また無声音の子音（f, s, t など）が有声音化する（v, z, d などになる）。たとえば「見る」(see)の過去形・過去分詞形は‘zee’d’、「言う」(say)の過去形・過去分詞形は‘zed’だ。そして、語尾の子音‘n’は‘m’に変わることが多く、例えば‘Devon’は‘Devom’になり、さらに‘Deb’m’とか‘Dem’などになったりする。ここまでを復習すると、‘We are from Devon.’は‘Us is vrom Deb’m.’あるいは‘Us be vrom Dem.’になる。

ロンドンの下町方言、いわゆる‘Cockney’と共通する特徴もある。それは語頭の子音‘h’の脱落である。映画『マイ・フェア・レディ』の主人公のcockney娘イライザはヘンリー・ヒギンズ先生の名前を「プロフェッサー・エンリー・イギンズ」としか発音できなかった。一方でcockneyでは二重母音「エイ」は「アイ」になるが（したがって『マイ・フェア・レディ』というタイトルには「わが麗しの淑女」という意味の裏に「メイフェア（ロンドンの高級住宅街）をマイフェアと発音する姉ちゃん」という意味が隠されている）、デヴォン方言では二重母音「エイ」は長母音「アー」になる。また語中の長母音「イー」が「エイ」と発音される。したがって‘cake’は「カーク」、「hay fever」（花粉症）は「アー・ヴェイヴァー」、そして‘seaside’は「ゼイザイド」だ。途中の母音が脱落する場合もあり、例えば「既婚の」(married)は「台無しにされた」(marr’d)になってしまったりする。

日本人は一般に英単語をカタカナで表記するとき、長母音と二重母音の区別にきわめて無神経である。例えば‘communication’を「コミュニケーション」、「boat」を「ボート」と書いて平気な顔をしているが、前者は正しくは「コミュニケーション」、後者はあまり正しくないが強いて言えば「ボウト」である。「コート」と書かれていてもそれが‘court’か‘coat’か‘cote’のいずれであるか、場合によってはにわかに判断できない。「ロード」に至っては‘l’と‘r’の問題もあるので、「主」なのか「荷物」なのか、「道」なのか「乗った」のかよくわからない。なぜ唐突にこんな話をするかというと、デヴォン方言では二重母音「オー」が長母音「オー」になってしまうので、日本人的カタカナ表記にとっては都合がよいのである。たとえば‘old’は本当は「オールド」でなければならないが、デヴォン方言なら「オールド」でよい。「ホーム」(home)は正しくは「ハウム」でなければならないが、この地方では「オーム」だ。デヴォンの文学的英雄として讃えられているチャールズ・キングズリー（1819~75）はエクセターとブリマスのほぼ中間に位置する‘Holne’という小さな村の出身であり、この地名の発音をカタカナでなるべく正しく書こうとすると「ホウン」だが、地元では単に「オーン」と発音される。デヴォンの北海岸にウェストウード・ホウ!という変な名前の町（感嘆符つきの地名は世界中でもここだけだろう）があるが、これはキングズリーの冒険小説『ウェストウード・ホウ!』（*Westward Ho!*）にちなんで名付けられた。このタイトルは「西行き出航!」という意味の船乗りの掛け声だが、デヴォン風発音をカタカナで表記すると「ウェストウード・オー!」になって、よりいっそう掛け声らしくなる。

デヴォンでは‘e’で始まる単語に気を付けなければならない。語頭の‘エ」は必ず「イ」か「アエ」のいずれかになってしまうので、‘end’は「アエンド」、「every」は「イヴリ」になる。また‘u’の短母音（cut, judgeなどの‘u’）と二重母音‘oi’（noise, boilなど）はいずれも短母音「イ」

になる。したがって‘put’は「ピット」、‘join’は「ジン」と発音される。同様に‘boy’は「ビー」だ。ついであるが、愛媛方言では女の子が「びー」、男の子は「ぼー」である。

一方でありがたいことに、日本人やフランス人が苦手とする子音‘th’がデヴォンでは発音しやすくなることもある。無声音の‘th’(throw, thinなど)が‘d’に置き換わり、数字の「3」が‘dree’になったり、デヴォン地方にもよくある「草葺き屋根の家」(thatched cottage)が「ダッチト・コティッジ」になったりする。「アザミ」(thistle)はデヴォン西部では‘dashel」、東部では‘doishel」になる。また語頭、語尾の‘th’は脱落することも多く、‘that’は「アット」、‘with’は「ウィ」になる。

デヴォン方言には次のような奇妙な特徴もある。まずは、子音‘r’が勝手に移動して、‘run’が‘urn’になったり‘print’が‘pirnt’(‘pernt’と綴られることもある)になる。また‘sk’は前後が入れ替わって‘x’になり、例えば‘ask’は「アクス」と発音される。さらには、(おそらくは)聞き間違いがそのまま定着したとしか思えない語彙がいくつかある。例えば「原稿」(manuscript)が「熱狂者の借証券」(mania-scrip)、「肉屋の肉」(shambles meat) ‘shamble’は肉屋のカウンター。農場の自家製肉と区別するためにこのような語句がある)が「鉱山発掘友達」(shammel-mate)、「先祖」(ancestors)が「伯母姉妹」(aunt-sisters)、「兆候」(symptom)が「ツェツェ蠅の大馬鹿野郎」(zim-tim)といったものだ。ことによると、面白がってわざと間違えているうちに定着したのかも知れない。

最後に、デヴォンに特有の言い回しや熟語をいくつか挙げておこう。普通は「外国へ」の意味で使われる‘abroad’がこの地方では「粉々に割れて」の意味でも使われる。たとえば‘My teacup fell off the table and went abroad.’と言われても、この用法を知らなければ「私のティーカップはテーブルから落下し、外国へ行った。」という訳の分からないセンテンスになってしまう。そ

れから‘Thank you’などのあとに付ける‘very much’はデヴォンでは‘billy-o’で、‘lak billy-o’の形で使われることが多い。また「コーンウォール人のお世辞」(Cornish compliment)とは「たいして価値のない贈り物」のことだ。コーンウォールはデヴォンの西隣の州である。そして‘Zindy-go-t’Matein’は主に衣服について使われる形容詞で「よそ行きの」という意味である。これはつまり‘Sunday-go-to-Matin’ということであり、「日曜日に朝の礼拝に行くための」という意味を表わす。田舎の小さな村の人たちは日曜日の朝にはたいてい教会に行くのであり、教会に行くときにはそれなりにちゃんとした服装で行くことから、このような意味になったのである。

